

島根大学における初修外国語としての中国語教育のあるべき姿を探る^(注1) ——過去10年間の中国語教育を顧みて

孫 樹林

はじめに

初修外国語としての中国語教育は如何に行うべきか、国立大学である島根大学の学生にとって最適・最善な中国語教育とは何か。ここ10年間、これらの課題を抱え、外国語教育センターの理念に従って、試行錯誤しつつ教育活動を行ってきた。十年一昔、10年目を迎え、過去の中国語教育の是非を省察すべく、本文では、(1)「中国語教育エッセンシャルミニマム」、(2)中国語教科書の編纂、(3)均質化・安定化・規範化の中国語教育と言語・文化一体化の授業を目指して、という三つの視点から検討してみたい。

I. 「中国語教育エッセンシャルミニマム」について

1. 「初修中国語教育エッセンシャルミニマム」策定の背景・経緯

外国語教育センターは「外国語教育の知的拠点」として16年4月に設立された。センターの教育理念により、組織的取り組みで標準化した教育を提供すべく、西脇宏センター長の企画・指導の下、各初修外国語は18年度より、それぞれ「〇〇語教育エッセンシャルミニマム」の検討・策定を始めた。

1) 作成の理念・プロセス・目標

教養科目としての学士課程教育の質を確保し、グローバル・未来的視点に立って、中国語の基礎をバランスよく身につけ、コミュニケーション能力の育成を重視し、国際涵養を有するグローバル人材を育成する規範的教育を行うことを理念とした。

この要綱の作成にあたって、日本国内の大学における中国語教育の状況を調査の上、国立大学の教育指標に適合し、とりわけ島根大学の理念を体現し、本学の実情を考慮し、外部試験を参照値にしつつ作成し、「中国語検定試験（中検）」（日本中国語検定協会）4級レベルを4単位取得時の到達目標とした。

2) 策定の主な基準・根拠

策定にあたって、以下の四点を主な基準・根拠とした。①センターの教育理念・目的。学生ニーズ・社会的ニーズに即した組織的な外国語教育の実現等。^(注2)②国内の大学における中国語教育の実状。例えば、開講年次、週時間数、単位数、到達目標、使用教科書、教授方法、成績評価、レベル、教育効果、等々。③国内外の検定試験と関係のガイドライン。中国の外国人留学生向けの中国語教育大綱『高等学校外国留学生漢語言專業教学大綱』、「HSK」（漢語水平考試＝中国）や「中国語検定試験」など。④島根大学の学生ニーズ・資質である。

2. 「中国語教育エッセンシャルミニマム」の内容および実施効果

1) 所定の五つの枠に基づき、それぞれの内容を定めた。（表1）はその概要である。

「中国語教育エッセンシャルミニマム」概要

発音	ピンイン, 声調, 関連の発音規則など
文法	基礎文法 80 (120) 項目
語彙	基礎語彙 510 (850) ~ 540 (900) 個
会話	基礎会話 80 (120) 文
中国事情	中国文化・事情 20 (35) 項目

(表1) ※括弧の中の数字は中国語教育で接する数。

2) 教育方法についても、骨太の方針を規定した。主に、組織的取り組み、授業方法、出題形式、採点基準、平均点、秀・優・良・可・不可の割合等についてである。

3) 「中国教育エッセンシャルミニマム」の実施効果

「中国教育エッセンシャルミニマム」の実施によって、中国語教育は良い教育効果を得ていた。次は、18年度～25年度まで（8年間）の成績評価のGPCA 値である。

中国語と初修全体の成績評価状況一覧（GPCA）・対比

	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	平均
初修全体	2.15	1.95	2.05	2.12	2.18	2.00	2.13	2.18	2.10
中国語	2.14	1.99	2.11	2.15	2.17	2.06	2.05	2.04	2.09

(表2)

8年間のGPCA 平均値は、初修全体の2.10に対し、中国語は2.09、差は0.01。中国語が初修外国語全体の指標となる数値。8年間の初修全体の最高・最低の差が0.23であるのに対し、中国語の最高・最低の差は0.18、比較的安定である。

「中国語教育エッセンシャルミニマム」の内容・方法が適宜であり、大体において目標達成した。それは、以下の3点から裏付けられる。①学生アンケート評価（好い評価、年度間の評価値が安定）②外部試験の合格者数（「中検」4級以上、毎年、平均合格者は10名ほど）③18年度～25年度まで（8年間）の成績評価のGPCA 値は適切で安定している。

II. 中国語教科書の編纂について

「中国語教育エッセンシャルミニマム」の策定と共に、その具体化する一環として、本学の中国語教育に最適でありつつ全国向けの中国語教科書の開発を模索した。

テキスト作成にあたって、なるべく「中国語教育エッセンシャルミニマム」が定められた内容に基づいて行い、とりわけ語彙と文法はそれらの使用頻度レベル（作成された使用頻度レベル別の語彙・文法リスト）に応じて編纂した。

そして、「規範性」と「言語文化一体化・文化性の重視」を編纂の理念とした。すなわち、規範的な中国語教科書として、恣意性（文法、表現、語彙）や不統一性（各課の格式構成や文法・語彙の数量など）を避け、正統性や標準性を重視することである。そして、教科書の内容（文章・例文など）はなるべく中国の文化を反映でき、文化性に富む表現の使用

などを工夫し、言語文化の一体化を追求すると共に、中国文化事情をコラムとして提示している。よって、言語学習と同時に中国文化の理解も実現でき、言語と文化が一体化する相乗効果を得るように配慮している。

中国語教員の協力により、これまではオリジナル製本の教科書を5冊、正式出版の教科書を4冊^(注3) 編纂した。学生反応、外部試験対応、他大学採用・評価などにより、初歩的な目標を達成したと考えている。

Ⅲ．均質化・安定化する中国語教育と言語・文化一体化の中国語授業を目指して

中国語教育の「エッセンシャルミニマム」が作成され、組織的取り組みで作成した教科書ができた後、残った課題は次の二点になると考えていた。第一、個の教員として、所定のエッセンシャルミニマムに従い、そして作成された教科書を使って、如何にして所定の教育目標を達成するか。第二、学生にとって、言語の他、必要な知識や有用な情報とは何か、如何に提供するか。言い換えれば、この二点は均質化・安定化する中国語教育と言語・文化一体化の中国語授業を模索し続けてきた原因である。

1. 均質化・安定化・規範化の中国語教育

中国語四技能のバランスに配慮し、中国語の基礎的運用能力を身につけることを目的としつつ、コミュニケーション能力の育成をより重視すると共に、センター教育方針に則って、均質化・安定化する中国語教育（中国語Ⅰと中国語Ⅱ、クラス間、メニュー間、年度間）を確保するように取り組んできた。目標達成のために、以下のような対策を講じた。

① 習得すべき知識・能力、学習レベル等をあらかじめ確定し、一貫させることを方針とした。② 授業の内容（語彙数、文法、レベル）と方法は、年度間、クラス間、メニュー間において相対的に統一化・安定化を実現し、マクロ的に対応してきた。③ 文法などを分かりやすく解説し、各課の重点を明確化・条理化する。クラス・学生の実情に応じ、臨機応変に対応する。授業中、一定の練習時間を確保し、宿題や小テストで微調整する。これらはミクロ的に対応する措置である。

目標（均質化・安定化・規範化）達成状況
(平成23～25年度前・後期中国語Ⅰ・Ⅱ評価状況一覧)

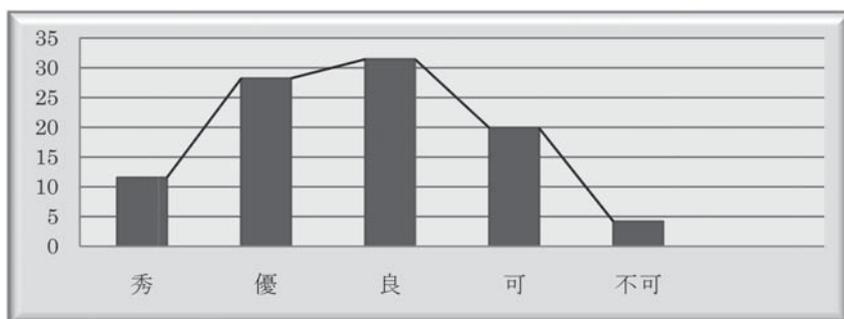
	秀	優	良	可	不可	未習	合格	不合格	GPCA
23前・Ⅰ	15.4%	28.2%	30.9%	17.4%	5.8%	2.5%	91.8%	8.2%	2.26
23後・Ⅱ	10.4%	23.7%	32.6%	23.0%	2.2%	8.1%	89.6%	10.4%	2.01
24前・Ⅰ	8.1%	27.0%	30.0%	19.9%	5.1%	5.0%	92.6%	7.4%	2.10
24後・Ⅱ	11.6%	28.4%	27.2%	21.4%	6.4%	4.9%	88.7%	11.3%	2.08
25前・Ⅰ	11.6%	35.3%	34.7%	14.4%	2.7%	1.2%	96.0%	4.0%	2.36
25後・Ⅱ	12.2%	25.8%	33.3%	15.1%	3.6%	10.0%	86.4%	13.6%	2.08
合計	11.55%	28.23%	31.45%	19.88%	4.16%	5.28%	90.85%	9.15%	2.15

(表3)

過去3年間の成績評価状況

評価	秀	優	良	可	不可	合格	不合格	GPCA
%	11.55%	28.23%	31.45%	19.88%	4.16%	90.85%	9.15%	2.15

(表4)



(表5)

日々工夫、努力していた結果、均質化・安定化・規範化した中国語教育の効果が得られた。それらは、過去3年間の成績分布^(注4)で実証され、(表3)(表4)(表5)で総合的に反映されている。GPCA 平均値は2.15であり、一定の水準を保ちつつ、かなり安定している。そして成績分布は、山型となり、理想的な構成であり、目標は基本的に達成したと言える。

2. 言語・文化一体化の中国語授業を目指す

人間がコミュニケーションするもっとも重要な手段である言語は、文化と社会の礎の上に築かれるものであり、それらに規定されつつそれらの変化に応じてつねに変容している。

そして、言語そのものは時代性や集団性などの特徴もあり、言語表現などにおいて上品と粗野、教養的と通俗的などの差異があるのである。その関係は、(図1)のようなものであり、すなわち言語は社会と文化を土台としつつそれに含まれているのである。



(図1) 言語・社会・文化の相応関係



(図2) 言語・社会・文化の連動的な相応関係

そして、言語・社会・文化は(図2)で示されるように、三者は人類文明の噛みあう三つの歯車のような連動的な関係にあり、三位一体でありつつ、相互促進しているのである。

したがって、中国語の授業では、中国の文化や社会と切っても切れない関係にあるのみならず、中国文化や社会の関連情報を提示しそれらの栄養分を上手に吸収することによって、中国語の上達に繋がり、かつ上品で文化的な上品な言語を習得することができると思われる。

こういった理念の下、10年前から今日に至るまで、言語文化一体化の授業をずっと模索しつつ実践してきており、一定の成果を獲得した。

1) 中国事情や中国文化を学習する必要性と目的

グローバル時代における大学生にとって、言語の学習を通じて、中国の伝統文化、中国現代社会・文化も理解し、よって国際的視野をもって中国の諸事情を理解・判断する能力の育成も重要であると考え、それらを授業の一環とし、授業で適宜に紹介したり議論したりするように授業を展開している。

その目的は次の二点である。①中国文化の特徴、多様性、中国の伝統文化と現代文化との相違点、それらに伴う表象や影響を認識させる。②中国の現状を認識し、文明史的視点から中国を展望する。

2) 中国事情や文化を学習する効果

学生アンケート評価では、「中国の文化や事情に多く触れ、中国への理解が高まった」等のようなフィードバックが多く、好評を得ている。

授業で紹介する主な中国事情・文化は主に次のようなものである。①中国文化・時事を随時紹介する。これらは一般的に、テキスト内容に関連する文化、流行、時事を中心とする。②文字の文化性を重視する。例えば、表意文字の漢字の特徴、意味、文化性など。試験や宿題などで書く文化を重んずる。日本の当用漢字との字形・意味の相違点。繁体字と簡体字における意義的な相違点、説文解字的視点から文化異化現象を認識するなどである。

一例をとってその効果を見てみよう。例えば、試験開始の前に、つねに中国の伝統文化・思想である「李下に冠を正さず」の漢詩を紹介し、その思想的な価値を一緒に確認する。それによって、試験中はカンニングなどの不正行為がほぼ発生せず、かつ右顧左眄のよう

な行為も観測されず、みなも謹慎して自らの解答に集中するようになるのである。

いま一つの例を挙げて、中国の簡体字と繁体字の文化的な差異を確認してみよう。

進	親	愛	産	飛	雲	導
进	亲	爱	产	飞	云	导

(表6)

(表6)の中の上の行は、昔の漢字、すなわち「正字」^(注5)であり、下の行は簡略化された「簡体字」である。中国語は表意文字であり、漢字の字形は意味を表すためのもっとも重要な要素の一つである。それだけに、漢字の字形をもってその意味を読み取ることは漢字理解のみならず、中国文化をより深く理解することもできる。そのため、中国語の授業で機を見て、正字と簡体字における構造上の意味の差異について適宜に検討する。

例えば、正字の「進」の字形からすれば、進めば進むほど良いという意味も含まれているが、それに対する簡体字の「进」は井戸に進むことになってしまう。正字の「親」は会えて親しむという意味があるのに対し、簡体字「亲」は会わない、見えないことになり、その親しむや親の内包が失われてしまう。正字の「愛」には心があるが、簡体字の「爱」は心が消えてしまい、その愛とは無実なものに堕落している。そして、正字の「導」は道が上にあり、その道に従って導くのに対し、簡体字の「导」はその根本である「道」を消してしまい、結局は道なしの導く・指導に変異している。

以上のような取り組みの狙いは、学生に興味を持って簡体字を覚えさせると同時に、解字的視点から中国伝統文化の特性ならびに現代の文化異化の状況を認識することである。

まとめと課題

1. まとめ：

島大における中国語教育のあるべき姿について今も探りつつも、10年間の中国語教育活動を通じて、その姿が次第に明晰化・安定化している。それは、①学生の中国語の基礎能力、②GPCA値、③「中検」4級以上の合格者数、④学生の国際教養の育成、⑤学生アンケート評価等により、証明された。

この段階的な成果の獲得は、「中国語教育エッセンシャルミニマム」に則って、言語応用と文化理解を共に重視しつつ、島大の学生のニーズに即した授業の工夫等の相互作用による結果である。

2. 課題：

以下の四点は、今後の個人の課題であり、中国語全体の課題でもあると考えている。①中国語の声調の安定化、ピンインの習熟、運用能力のより一層の向上。②課外の学生支援

をより充実させる。③初修中国語教育と、平成 27 年度からスタートする特別副専攻プログラム「中国語実用化プログラム」との関係、位置づけ等についての検討・対応が重要であり必須不可欠である。④地域貢献、地域における発信源・国際交流の拠点としての役割を担うべきである。

注：

1. 本文は、第 62 回「中国・四国地区大学教育研究会」(26・6・15, 島根大学にて) 外国語(初修)分科会における発表資料に少し加筆したものである。
2. 詳細については、島根大学外国語教育センターのホームページをご参照ください。
3. 『初修中国語テキスト標準中国語<総合編>』(共著, 2009 年 10 月, 朝日出版社), 『初修中国語テキスト標準中国語<総合編>』(共著, 2009 年 10 月, 朝日出版社), 『標準中国語・読解力 UP 編』(共著, 2012 年 1 月, 朝日出版社), 『初修中国語テキスト・佳縁漢語』(共著, 2014 年 3 月, 朝日出版社)
4. データー上の事情により、過去 3 年間の成績分布しか示すことはできない。
5. 「正字」とは正しい漢字のことであり、言語学上の称呼であるが、中国では普通「繁体字」と言い、正字・繁体字は、簡体字(簡化字)に対するものである。